

音楽科における小中一貫教育に関する研究(2)

～「共通事項」の取り扱いを中心として～

菅 裕^{*1}・藤本いく代^{*2}・阪本幹子^{*2}・浦 雄一^{*2}・竹井成美^{*2}
稲野さやか^{*3}・岡元雅代^{*4}・谷口朋美^{*4}・山下さちか^{*5}・谷口佳奈^{*5}

Research on the Consistent Education
of an Elementary School and a Junior High School in Music Class(2)
Research on the Handling about Musical Elements

Hiroshi SUGA, Ikuyo FUJIMOTO, Mikiko SAKAMOTO, Yuichi URA
Shigemi TAKEI, Sayaka INENO, Masayo OKAMOTO, Tomomi TANIGUCHI
Sachika YAMASHITA, Kana TANIGUCHI

本研究は、宮崎大学教育文化学部が平成23年度から文部科学省の予算措置を受けている3年間の研究プロジェクト「小中一貫教育支援プログラムの開発と実践～小中一貫教育に関する総合的研究とそれを基盤とする新人教員養成及び現職教員研修～」の一環として、小中一貫教育の視点から、音楽科学習指導要領に新たに加えられた「共通事項」の内容の扱いを中心とする具体的な指導内容について検討するものである。

昨年度の研究では、小学校1年生における共通教材「ひのまる」の授業実践をもとに、共通事項の「拍」の存在を子どもたちに気づかせる手立てについて検討した。その結果、教材提示場面における教師の範唱方法、拍と速度との混乱を避ける用語上の工夫、休符上の拍の存在に気づかせるための具体的な手立てについて課題が残った(竹井他 2012)。

そこで今年度は、これらの課題を踏まえ、拍の存在に気づかせることをねらいとする小学校1年生の授業を再実施するとともに、小学校と中学校の共通事項の学習の連続性について検討するために、中学校における楽器の音色に関する授業を実施した。

1 「拍」の意識化をねらいとする小学校第1学年における実践

1.1 今年度の改善点

昨年度の反省を踏まえた具体的な改善点は次の2点である。

1. 歌唱活動の前に4音節語や3音節語を唱える言葉あそびを実施する。その際、両手の人差し指を軽く叩く(以下、指拍子と呼ぶ)ことで拍の感覚を内面化する。また3音節語の後には休符を示すための1音節“ほ”を加え、休符上の拍を意識化させる。
2. 範唱CDに合わせて歌わせる際、意図的にボリュームを下げ、内的に拍を維持しながら歌うことに挑戦させることで、声を合わせて歌う際の拍の重要性に気づかせる。

*1 宮崎大学大学院教育学研究科

*2 宮崎大学教育文化学部

*3 宮崎大学教育文化学部附属中学校

*4 宮崎大学教育文化学部附属小学校

*5 宮崎大学教育文化学部附属幼稚園

1.2 指導計画

具体的な指導計画は次のとおりである。

1 題材の目標

A 表現 (1) ア エ	【音楽への関心・意欲・態度】	拍の流れに関心をもち、拍の流れに乗って歌ったり体を動かしたりする活動に進んで取り組もうとしている。
	【音楽表現の創意工夫】	拍の流れを感じ取って、歌い方や体を動かす活動を工夫している。
	【音楽表現の技能】	拍の流れに乗って、正しい音程で歌ったりフレーズのまともに気を付けて歌ったりすることができる。
	【鑑賞の能力】	拍の流れを感じ取り、楽曲の楽しさを味わいながら聴くことができる。

2 題材名：こころのうた

3 題材について

本題材は、規則的に刻まれる拍の流れにのって歌うことを主なねらいとしている。

教材曲「ひのまる」は、4つのフレーズからできている斉唱曲である。7つの4分音符+4分休符のリズムパターンの繰り返しでできているので、フレーズを自然に感じながら歌うこともできる。4分音符が分割されることはなく、拍の流れを感じやすい曲となっている。また、フレーズの最初の音は f^1 a^1 d^2 c^2 となっており、第3フレーズに向けて曲の山を感じることもできる。低学年の子どもは友達と一緒に声を合わせて歌う活動に意欲的だが、必要以上に大きい声で自分勝手な歌い方をしてしまい、声を合わせて歌う表現の良さが感じられない傾向もある。

このような内容を学習することは、音楽の楽しさを味わい、拍子感やリズム感などの基礎的な能力を育てるうえでも意義深い。

4 子どもについて

子どもは、音楽を感じて体を動かしながら演奏したり鑑賞したりしている。簡単なリズム視唱にも楽しみながら取り組んでいる。

子どもはこれまでに、「はくをかんじとろう」の題材において、言葉のリレーをしたり、手拍子に合わせて歌を口ずさんだりしてきた。また、曲に合わせて体を動かしたり、カスタネットを鳴らして速度や強弱を変えて表現を楽しんだりする姿が見られるようになってきた。題材「きせつをうたおう」では、歌詞に着目し、「『ひろいな』『おおきいな』という言葉があるから強く歌いたい。」というような曲想に関する工夫をする姿もみられるようになってきた。

しかし、前奏を聴いて拍の流れを感じ取ったり、同じ速さを意識して曲の最後まで歌ったりすることは十分とは言えず、これからの学習によるところが大きい。

5 自信をもって学び合う子どもを育むための手立て

段 階	生み出す	メトロノームを鳴らしながら歌ったり体を動かしたりする活動や、手拍子に合わせて友達の名前やもの名前を当てはめて言葉のリレーをしたりする活動を取り入れることで、拍の流れを感じることができるようにする。
	挑む	拍の流れを図で視覚化し、指で押さえながら歌わせることで、等間隔で流れる拍を体感できるようにする。また、歌う途中で音源の音量を0にしたりもともどしたりすることで、拍の流れを保ちながら歌うことの楽しさを味わうことができるようにする。
	生かす	強弱の変化がある曲を、手拍子を打ちながら鑑賞させることによって、強弱の変化があっても一定の間隔で拍が流れていることに気が付くことができるようにする。それを生かし、拍の流れを感じながら曲の山に気を付けて「ひのまる」を歌うことができる。

6 自信をもって学び合う子どもを育むための指導計画(3時間)

段階	主な学習活動及び学習内容	教師のかかわり	具体的な評価規準
生み出す(1)	1 歌ったり体を動かしたりしながら拍の流れを感じる。 < 1時間 > 拍の確認 ラデツキ一行進曲の鑑賞 2 学習の見通しをもつ めあて及び学習問題 はくに のって たのしく うたおう。	メトロ ノームに合わせて歌わせたあとに「どうしてみんなの歌はそろっているの。」と尋ねることで、拍の存在に気づくことができるようにする。 手拍子に合わせて言葉のリレーをする活動を取り入れることで、拍は一定間隔で刻まれていることを体感できるようにする。	拍の流れに合わせて歌ったり言葉遊びをしたりする活動に、進んで取り組んでいる。 (関・意・態)
本時1/1 挑む(1)	3 拍の流れにのって歌う活動に取り組む。 < 1時間 > 拍を意識した「ひのまる」の歌唱 ・ 曲の聴取 ・ 拍の確認 ・ 音取り 拍の流れに気を付けた歌唱 ・ 手拍子に合わせての歌唱 ・ CDに合わせての歌唱 4 学習のまとめをする。 < 1時間 > 強弱の変化のある鑑賞曲の聴取 曲の山を生かした歌唱	拍の流れを図で表した掲示物を提示することで、曲が始まってから終わるまで規則的に拍が流れていることを視覚的にとらえることができるようにする。 ○ 学習プリントを、指で押さえながら歌わせることで、拍を体感しながら歌うことができるようにする。 ○ 手拍子だけで歌ったり速さを変えて歌ったりする活動の場を設定することで、一定の拍が刻まれていることに気づくことができるようにする。 範唱CDを途中で消したり元に戻したりしながら歌わせることで、拍の流れを意識して歌うことの大切さを味わうことができるようにする。 ○ 強弱の変化がある曲を、手拍子を打ちながら鑑賞させることで、強弱の変化があっても一定の間隔で拍が流れていることに気づくことができるようにする。	拍の流れに気を付けながら、正しい音程で歌っている。 (技能) ○ はじめの拍の流れを保ちながら、最後まで規則的な拍の間隔で歌うことができる。 (技能) ○ 強弱の変化に関係なく、一定間隔で拍が流れていることの心地よさを味わいながら聴いている。 (鑑賞)
生かす(1)		○ 「日の丸が一番高く上がるころはどこか。」と問うことで、曲の山に気づくことができるようにする。 ○ 今まで学習したことや鑑賞で感じ取ったことを意識して歌わせることで、強弱の変化があっても拍を感じながら歌うことができるようにする。	○ 拍ののりながら曲の山の歌い方を工夫している。 (創意工夫)

7 本時の目標

拍の流れに気をつけながら歌うことができる。

8 指導過程

学習活動及び学習内容	教師のかかわり	用具準備物
1 本時の学習内容をつかむ。 前時学習のふりかえり ・ 言葉のリレー 教材曲の聴取 本時のめあて <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> はくに あわせて ひの まるを うたおう。 </div>	前時に行った言葉のリレーを再度行うことで、一定間隔で刻まれる拍を想起することができるようにする。 オリンピックの写真をみせることによって、教材曲への興味をもつことができるようにする。	前時掲示物 メトロノーム 写真 キーボード
2 学習の見通しをもつ。 学習の流れ ・ おんがくにあわせて ・ おんがくなして 3 音程に気を付けて、「ひのまる」を歌う。 拍の確認 音取り	拍の流れを掲揚台に上がった日の丸で例えた図を提示することにより、拍の流れを視覚的にとらえることができるようにする。 学習プリントを配付し、指で押さえながら歌う活動を取り入れることで、拍を体感しながら歌うことができるようにする。	掲示物 学習プリント
4 拍の流れを意識して、「ひのまる」を歌う。 手拍子に合わせての歌唱 CDに合わせての歌唱	四分休符を“ほ！”と言いながら手拍子に合わせ、「ひのまる」を歌わせることで、休符であっても拍が存在するを感じながら歌うことができるようにする。 範唱CDを途中で消したり元に戻したりしながら歌わせることで、拍の流れを意識して歌うことの大切さを味わうことができるようにする。	CD
5 学習のまとめをする。 ふりかえり 次時の見通し	学習プリントに拍に合わせて歌うことのよさや楽しさが書かれている子どもに意図的に感想を発表させることで、学習の成果を感じることができるようにする。	

9 本時の評価規準

はじめの拍の流れを保ちながら、歌うことができる。(音楽表現の技能)【演奏・発言】

1.3 授業の実際

「ひのまる」の提示場面において、子どもたちは、「ひのまる」の歌詞が、4音節と3音節の組み合わせによって構成されていることにすぐに気づき、一定の拍に合わせて歌詞を唱えることができた。これは、導入時に4音節語と3音節語の言葉あそびを十分に実施した効果が現れたものといえる。また各節の末尾の四分休符に当たる場所には、休符を表す音節“ほ”を唱えることができおり、休符上の拍の存在も意識化されていることが伺えた。

YAMAHAキーボード(SKB-J700)に内蔵されている電子メトロノームを使って速度を速くしたり遅くしたりして「ひのまる」を歌唱する場面では、速度が変化してもメトロノームの音に合わせて正しく歌うことができおり、内的に一定の拍を維持できていた。

CDのボリュームを意図的に絞りを、再びもとに戻す場面では、子どもたちは、CDが聞こえていない間に、テンポを維持する方法について試行錯誤し、指拍子の応用によって問題を解決できた。

2 楽器の音色に注目させる中学校の実践

言語活動の充実と関連して、音楽科学習指導要領では特に「根拠を持って批評する」ことが求められている。つまり音楽の構造や演奏表現の工夫と、それによってもたらされる曲想変化との関連を結びつけながら音楽の特質について言語化できなければならない。このためには、共通事項に示された音楽を形づくる要素について注目させ、その特徴について気づいたことについて話しあう活動を設定する必要がある。

ここでは中学校1学年に実施した「和楽器の音色」に注目させる授業を紹介する。

2.1 指導計画

指導計画は次のとおりである。

1 単元名 和楽器の魅力や味わい

2 目標

和楽器に親しむことで、日本の伝統音楽について理解を深めようとする意欲や態度を育てる。

和楽器の音色や響きのよさや美しさを感じ取ることができるようにする。

和楽器の音色の美しさを感じながら実際に弾くことができるようにする。

楽曲の雰囲気や曲想の変化を感じ取って聴き、そのよさを自分の言葉で相手に分かりやすく伝えることができるようにする。

3 指導観

音楽科の学習内容は、大きく表現と鑑賞の二つの領域に分けることができる。今回の教育課程の改訂に伴い、和楽器については、我が国の伝統的な音楽文化のよさに気付き、尊重しようとする態度を育成するためには、実際に和楽器を活用した活動を通して、我が国や郷土の伝統音楽を体験することがきわめて大切であるとして、3年間を通じて、1種類以上を用いるようにすることとなっている。また、「和楽器を表現活動における器楽の指導に用いることはもちろんであるが、歌唱や創作、鑑賞との関連も図りながら、実際に和楽器に触れ、体験することで、我が国や郷土の伝統音楽の学習効果をさらに高め、充実させていくことが期待できる」とある。これまで、小学校から和楽器については鑑賞教材として扱う程度で、実際に楽器に触れてみるという活動はあまり学習していない。

本単元では和楽器に実際に触れることで、生徒にとって和楽器がより身近なものとなり、また音色を感じながら演奏を工夫することで、日本の音楽に対する関心をより高め、日本の音楽を愛好する生徒を育てたい。また、和楽器の奏法や特徴、そこから得られる独特の雰囲気を味わい、楽器や楽曲のよさを総合的に感じ取ることによって、日本の音楽に対する親しみを深められる。

本学級の生徒は、音楽に対する興味・関心があり、意欲的に学習に取り組もうとする生徒が多い。歌唱活動ではリーダーを中心に自主的に練習し、器楽演奏ではリコーダーの練

習に意欲的に取り組んでいる。しかし、日本の音楽については、触れる機会がほとんどなく、箏や三味線については、小学校の授業で見たことがある程度である。また、小学校で雅楽「越天楽」の授業を受けた生徒が、クラスの3分の2程度いる。授業での和楽器の実技演奏は、ほぼ全員の生徒が、今回が初めてである。

また、5月に「人間力育成の関連要素」について意識調査を行ったところ、次のような結果が得られた。評価については、(4・・・できている、3・・・どちらかといえばできている、2・・・どちらかといえばできていない、1・・・できていない)の4段階である。

	質問項目	4	3	2	1
4	日常生活や授業において、課題発見をめざして、様々な方法で考えることができますか。	10	27	3	0
6	日常生活や授業において、いろいろな立場や視点でものごとを考え、見たり聞いたりすることができますか。	12	23	4	1
7	日常生活や授業において、情報や資料、データを用いてわかりやすく具体的に伝えることができますか。	11	16	13	0
8	日常生活や授業において、あいづちなどを用いて、相手が話しやすい表情をすることができますか。	10	19	8	3

このことから、本学級の生徒は、相手の立場を理解し、意見をしっかり聞こうとする態度がやや不十分であるが、課題発見を目指して様々な方法で考えることや、リーダーシップをとって話し合いをしたり、相手に分かりやすく伝えたりすることには、積極的に取り組む姿勢が見られる。

そこで、本単元の指導では、実際に和楽器に触れることによって日本の音楽をより身近なものとして感じ取り、奏法を工夫したり箏と三味線で合奏したりすることで、表現活動の幅も広げていきたい。指導にあたっては、補助の先生も入り、演奏の仕方や調弦などで対応する。第一次では、和楽器を通して本単元への興味・関心を高め、楽器の仕組みについて学び、演奏方法を理解していく。実際に、和楽器に触れてみることで和楽器への親しみを深めながら、その独特な音色や響きを体験する。また、箏独特の奏法による微妙な音程の変化を感じ取り、ピアノなどの楽器では表現できない微妙な音程や音の変化に着目し、生徒同士で音色の変化を聴き合い、音色の変化を工夫しながら演奏できるように展開していきたい。第二次では、「さくらさくら」を実際に演奏し、グループに分かれて箏と三味線の合奏を聴き合い、感じとったことや音色の響きなどについて発表する場を設定していきたい。第三次では、箏曲「六段の調」を鑑賞することで、箏の独特の奏法や音色の変化やリズムの効果など、感じ取った箏曲のよさや美しさについて感想をまとめ、実際に演奏した感想も入れながら、意見交換の場を設定していきたい。この授業を通して、日本の伝統音楽を理解するとともに、我が国の様々な音楽に対する親しむ態度を養いたい。

本校の研究内容の一つにある「学力」を身に付けるために、本単元では、「思考力」と「表現力」に焦点をあてたい。「思考力」には、どのように演奏したら美しい音色になるのか、どのような表現方法がふさわしいのか考える場を設定したい。また、「表現力」については、お互いに演奏の感想を発表することで、自分の考えたことを相手に分かりやすく伝え、それを自分の表現として演奏に生かしていく場としていきたい。

4 単元の指導計画(全3時間)

	学習内容・活動	言語活動に関する指導上の留意点	他教科との関連
第一次 (1)	箏と三味線の楽器の特徴や仕組みについて知る。箏と三味線の演奏の仕方を知り、実際に演奏してみる。「さくらさくら」の練習をする。	・箏と三味線を演奏できる状態に準備しておく。 ・教科書を用いて、楽器の特徴や奏法について説明する。 ・箏と三味線を練習する場を設定する。	国語科 「説明・伝達」
第二次 (1)	「さくらさくら」の練習をする。箏と三味線で合奏し、感じたことを発表する。	・「さくらさくら」を練習する場を設定する。 ・箏と三味線で合奏の演奏について、説明する。 ・グループ分けして、合奏を聴いた感想を発表する場を設定する。	国語科 「説明・伝達」 「対話・討論」
第三次 (1)	箏曲「六段の調」を鑑賞し、感想をまとめる。曲の感想や和楽器の魅力について発表する。	・箏曲「六段の調」を鑑賞する場を設定する。 ・曲の感想や和楽器の魅力や味わいについて、感想を発表する場を設定する。	国語科 「対話・討論」

5 本時の学習指導

(1) 目標

箏や三味線の響きを感じながら、「さくらさくら」を演奏することができる。
 「さくらさくら」の合奏を聴いて、感じたことや思ったことを発表できる。

(2) 資料及び準備

教科書、器楽の教科書、箏5面、三味線25棹

(3) 学習指導過程

(注)太囲みは、思考力・判断力・表現力を育成するための言語活動の中心場面。

学習内容及び生徒の活動	教師の支援
<p>1 本時の目標を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>箏や三味線の響きを感じながら「さくらさくら」の演奏ができるようになろう。 「さくらさくら」の合奏を聴いて、感じたことや思ったことを発表しよう。</p> </div> <p>2 前時の学習を復習する。 教科書で奏法を確認する。 既習曲を練習する。</p>	<p>本時の目標を確認できるように、掲示物で提示する。</p> <p>箏と三味線がすぐに演奏できるように、楽器の準備や調弦をすませておく。</p> <p>前時の学習を思い出し、奏法について確認できるようにするために、教科書で確認し、既習曲を練習する時間を確保する。 正しい姿勢や正しい楽器の持ち方ができるように、机間指導で確認する場とする。 演奏が難しい生徒が活動に取り組めるように、簡易楽譜を提示する。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>3 「さくらさくら」の練習をする。</p> </div>	<p>読譜の仕方について確認できるようにするために、楽譜を提示して説明する。</p>

<p>箏と三味線に分かれて練習する。 箏と三味線、それぞれで演奏する。 合奏練習する。 2グループに分かれて、演奏する。 演奏を聴いた感想を発表する。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">予想される生徒の反応</p> <p>2つの楽器が響きあって1つの曲になっていた。 音の余韻があった。 箏の高い音が響いていた。 三味線の音は、箏よりも低く響いていた。</p> </div>	<p>三味線のスクイやハジキなどの奏法を理解することができるように、教科書で確認する場を設定する。 各自で練習できるようにするために、個別指導の時間を設定する。 箏と三味線で合奏ができるようにするために、合奏練習をする時間を確保する。</p> <p>練習の成果を発表できるように、2グループに分かれて、合奏の発表をする場を設定する。 音色や響きを確認するために、合奏を聴いて感想を考え発表する場を設定する。</p>
<p>4 本時のまとめをする。 今日の授業の振り返りをする。</p> <p>次時の予告を聞く。</p>	<p>今日の授業を振り返ることができるように、感想を発表する場を設定する。 次時は、演奏を振り返るために、「六段の調」を鑑賞することを確認する場とする。</p>

(4) 本時の評価規準

評価規準	評価方法
<p>箏や三味線の奏法を理解して、「さくらさくら」の演奏をすることができる。 箏と三味線の合奏を聴いて、感じたことや思ったことを発表することができる。</p>	<p>観 察 発 表</p>

2.2 授業の実際

「さくらさくら」をピアノで演奏したものと箏で演奏したものとを比較させることにより、和楽器の音色の特徴に注目させることはできた。しかしながら箏や三味線の発音について自分たちで試行錯誤するだけに終わっており、CD等の鑑賞を通じて「本物」の和楽器の音色を味わう場面が欠落していた。このため生徒にとって目標となるべき和楽器の「美しい音色」のイメージの形成が不十分であり、参照する手がかりが与えられていない状態でピアノとの音色の比較や試行錯誤による発音の模索を行わせることになってしまった。

3 今後の課題

本研究では、共通事項を指導内容とする小学校、中学校の音楽授業実践の分析を行った。しかしながら本研究が目標としている小・中一貫教育の視点からの指導内容の検討はまだまだ不十分である。今後、小・中連携を視野に入れた音楽カリキュラムを開発していくためには、共通事項の内容を発達段階に即して系統的に配置していく必要がある。

音楽科の指導内容を系統的に配置することについてはこれまでも様々な試みがなされてきたものの、いまだに課題が多い。三村ら(2010)は、小学校の音楽教科書分析と小学校教諭へのインタビュー調査をもとに、高学年になるに従って増えていく「曲の気分」や「曲想」を「思い浮かべる」「味わう」「感じ取る」学習と、低学年におけるリズムや旋律の特徴の学習とが系

統的に連結されていないと結論づけている。つまり高学年になるに従って情意的な目標のみが強調され、それを支える認知的領域や技能領域との関連性の検討が十分になされておらず、このため各学年段階における認知・技能面の達成課題やその連続性が明らかにされていないのである。

小・中一貫教育を視野に入れた共通事項を軸とする指導内容検討のためには、今後、小学校から中学校に至る各学年段階において、共通事項に関わる達成課題を明確にしていく必要がある。

例えば日本学校音楽教育実践学会は『生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム』において、リズムについて次のようなカリキュラムを構成している(日本学校音楽教育実践学会 2006)。

表1：生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム(2)-2。
 「音楽の仕組みと技能」の柱 日本の伝統音楽以外の音楽編：形式的側面(82-83頁)

	幼稚園	小学校			中学校	高等学校
		低学年	中学年	高学年		
形式的側面	拍の知覚 有拍	拍の知覚 有拍と無拍	拍の知覚 有拍と無拍	拍の知覚 有拍と無拍 止まる拍 (フェルマータ)	拍の知覚 有拍と無拍 止まる拍 (フェルマータ)	拍の知覚 有拍と無拍 止まる拍 (フェルマータ)
		拍子の知覚 強拍と弱拍	拍子の知覚 強拍と弱拍	拍子の知覚 強拍と弱拍 (シンコペーション)	拍子の知覚 強拍と弱拍 (シンコペーション)	拍子の知覚 強拍と弱拍 (シンコペーション)
		単純拍子 (2拍子, 3拍子)	単純拍子 (2拍子, 3拍子, 4拍子)	単純拍子と複合拍子 (2拍子, 3拍子, 4拍子, 6/8拍子)	いろいろな拍子 (複合拍子, 混合拍子, 変拍子) 無拍子(現代音楽, 世界の民族音楽)	いろいろな拍子 (複合拍子, 混合拍子, 変拍子) 無拍子 (現代音楽, 世界の民族音楽, 中世・ルネサンスの音楽)
	リズムパターンの知覚 単純なリズムパターン (4分音符と8分音符のリズムパターン, 4分音符と2分音符のリズムパターン)	リズムパターンの知覚 単純なリズムパターン (4分音符と8分音符のリズムパターン, 付点リズムパターン)	リズムパターンの知覚 やや複雑なリズムパターン (4分音符と8分音符のリズムパターン, 付点リズムパターン)	リズムパターンの知覚 やや複雑なリズムパターン (4分音符と8分音符のリズムパターン, 付点リズムパターン, 3連符のリズムパターン)	リズムパターンの知覚 複雑なリズムパターン (ロックなどポピュラー音楽のリズムパターン, サンパなど世界の諸民族の音楽のリズムパターン)	リズムパターンの知覚 複雑なリズムパターン (ジャズなどポピュラー音楽のリズムパターン, サンパなど世界の諸民族の音楽のリズムパターン)

このカリキュラムでは、拍や拍子、リズムに関連する概念が「シンプルな有様からより複雑で多様な有様を学習するように広げていくという流れ」(21頁)にそって形式・内容・技能の3つの側面で構成されている。例えば8分の6拍子は4分の2拍子や4分の3拍子よりも「複雑な」拍子として小学校高学年に位置づけられている。

確かに拍子の構造について概念的に理解する上では、8分音符による3拍子と付点4分音符

による2拍子が階層的に組み合わせられている8分の6拍子は、4分の2拍子よりも複雑である。しかし、子守唄やあそび歌の中には多くの6拍子楽曲があり、それらの楽曲を歌いながら体を揺らしたり、手あそびをしたりすることは幼児にとってそれほど困難なことではない。つまり何を達成すべき行動目標にするかによって、複雑さの基準は変わってくる。

したがって重要なことは、これらの共通事項に関わる指導内容を、明確で具体的な行動目標に変換し、系統的に各学年に位置づけていくことにある。

Abelesらは、行動目標は次の4つの内容を含むものでなければならないと述べている(Abeles et. al 1995)。

1. 演奏・行動・操作など、観測可能な行為を示す動詞
2. その行為が生起する状況についての記述
3. 到達すべき行為の質に関する基準
4. 行為の主体としての学習者 (p.246)

これらの内容を含む行動目標は例えば次のようなものになるであろう。

- 「児童は、無伴奏で、指拍子で拍を示しながら、一定の速度で ひのまる を歌う」
 「生徒は、CDの演奏と自分の演奏の音色の質の違いに気づき、奏法を工夫して美しい音色で箏を演奏する」

もちろん行動目標の記述には限界がある。例えば前述の2番目の目標において到達すべき行為の質に関する基準に相当する「美しい音色で」の部分について、その判断基準を明確に記述することは困難である。しかし共通事項について小・中一貫教育を視野に入れたカリキュラムを構築していくためには、各学年段階における到達目標行動を可能な限り明確に示し、前の段階の達成目標が次の段階の準備となるようにシーケンスを構成していくことが不可欠となる。

来年度の研究では、まず共通事項に関連して要求される到達課題を児童・生徒の実態から各学年段階ごとに検討し、それらを系統的な行動目標として設定した長期的な指導計画を作成し、実践を通じてその有効性について検証していきたいと考えている。

文献

- 1) Abeles, Harold F., Hoffer, Charles R. & Klotman, Robert H. (1994). *Foundations of music education Second edition*. Schirmer Books : New York and Toronto.
- 2) 竹井成美・藤本いく代・阪本幹子・菅 裕・稲野さやか・岡元雅代・谷口朋美・山下さちか・松田美由紀 (2012) 「音楽科における小中一貫教育に関する研究(1):『共通事項』の取り扱いを中心として」『宮崎大学教育文化学部附属教育実践総合センター研究紀要』20, 59-69頁。
- 3) 日本学校音楽教育実践学会編 (2006) 『生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム: 幼稚園から高等学校まで』東京書籍。
- 4) 三村真弓・河邊昭子・福田秀範・中村将之・青原栄子・大橋美代子・吉富功修・徳永崇・長澤希 (2010) 「音楽リテラシー育成のための基礎的研究(2): 小学校音楽科教科書のカリキュラムの検討を中心」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』38, 143-148頁。